

本論文は、北タイ、チェンマイの伝統宗教である霊媒術に関する研究である。本論文の目的は、個々の霊媒によるセッションに加えて、霊媒たちの集団儀礼に焦点を当て、霊媒術とその宗教実践の全体像を明らかにすることで、20世紀後半以来のチェンマイの霊媒術研究に新たな民族誌や視座を提示し、現代タイの地域社会における宗教文化の重要性を明示することにある。さらに本論文の目的は、北タイの宗教実践の事例を通して、現代世界における近代化と宗教現象の関係性に関する新たな視座を提示し、現代世界のなかの民衆の宗教実践とその可能性について論じることにある。

序章では、近年の宗教現象や宗教復興運動に関する議論を批判的に検討すると共に、タイ社会と宗教の不可分なむすびつき、さらには20世紀末以来のチェンマイの社会変容と霊媒術の復興について包括的に論じた。

モダニティが進展するにつれて、現代世界ではさまざまな宗教現象や宗教復興運動が生起しており、呪術に関する関心と実践が世界各地で高まっている。宗教現象と現代世界のダイナミズムを結び付けて論じる傾向が顕著であるが、一連の議論には、宗教現象イコール社会変容を示す単なる一事例と見なす傾向がある。これは、現代世界の多動的なダイナミズムを構成するありとあらゆる具体的な現象や事例を社会変容の証拠と見なし、それ以上は何ら顧みないという一種の還元主義に他ならない。

このような議論は、一見魅力的である反面、克服すべき点を少なからず含んでいる。本論文の考察対象である現代タイの宗教現象のなかには、確かに社会変動との不可分の関係を示すものも多いが、全部が還元主義で解けるわけではない。現実の宗教現象のダイナミズムはより多動的であり、儀礼実践が持つ意義については、現代タイ社会の社会関係というコンテクストのなかで理解しなければならないのである。

東南アジア大陸部のタイは上座部仏教国であるが、精霊信仰をはじめとする民間宗教もまた社会の隅々に浸透している。20世紀末以来、農業の衰退と工業の発展が顕著となり、都市化・消費社会化が進展すると、民間宗教の新たな潮流がタイ社会に出現した。一般にタイの人びとには、文化的アイデンティティを宗教の新たな潮流のなかに広く探し求めると同時に、現実を変革する手段として宗教的手段に依拠する傾向がある。タイ社会には宗教的思考が埋め込まれており、宗教抜きでタイ社会について語ることは不可能なのである。

北タイ、チェンマイの地域社会についても同様である。インドシナ半島北部に位置するチェンマイは、13世紀末の建都以来、ラーンナー王国の中心地として栄えた。16世紀中頃からビルマに支配されたが、18世紀末には再び独立し、20世紀初頭に現在のタイ王国の前身シャム王国に併合された後はタイの一地方となった。チェンマイは、インドシナ半島の伝統的都市国家ムアンとしての名残をとどめており、数々の年中行事的宗教儀礼や独自の文化を誇っている。社会経済的に見ると、20世紀末以来、チェンマイでも、タイ国内の他地域同様の状況が生じている。1980年代前半にはサービス部門が農業部門を上回るようになり、以来、製造業・工業・貿易部門が成長し続けている。

このような社会状況の下で、チェンマイ特有の宗教復興現象や新たな宗教現象が生起したが、本論文の考察対象である霊媒術もその一つである。霊媒術は、伝統的な精霊信仰に根ざしながら、村落域の中間階層・下層の人びとに対する影響力を持っている。20世紀末以来、チェンマイでは、信奉者のさまざまな問題を解決する方法として、霊媒によるセアンスが定着している。

第1章では、現代のチェンマイの霊媒術の復興現象が、ラーンナー王国時代以来の精霊信仰と深いつながりを持つことを確認した。ラーンナー王国時代のチェンマイには、社会空間や生活空間の随所に精霊が宿るという信仰が存在し、なかでもチェンマイの守護霊祭祀は、歴代の王権の正統性を構築し、自らの国家権力を維持する役割を果たしていた。20世紀初頭のシャムへの統合によって王権の正統性が弱体化するにつれて、守護霊祭祀は衰退していったが、人びとのあいだでは、社会空間や生活空間の随所に精霊が宿るという信仰が、今もかなりの程度保持されている。

1970年代以降、近代化の波が北タイにも押し寄せると、伝統的な枠組みを大きく超える新たな霊媒術とその宗教実践が出現し、21世紀を迎えた今も、チェンマイ地域社会に定着している。霊媒術の霊媒の憑依精霊には、母系祖霊や村の守護霊といった伝統的な共同体の守護霊と並んで、託宣を与える位の高い守護霊として一括される精霊がある。霊媒術の主要な宗教実践には、個々の霊媒が信奉者の要請に応じて執り行うセアンスと、霊媒たちが集団で実施する儀礼の2つがある。

第2章では、2名の長老格の女性霊媒とその信奉者によるセアンスの諸事例について検討し、霊媒術がチェンマイ地域社会とどのような関係を取り結んでいるのかを考察した。一般に霊媒術の信奉者は、セアンスにおいて、霊媒＝精霊に相談しながら様々な悩みや問題の解決を図るが、一見すると、これらの霊媒のセアンスには相異なる傾向が見受けられる。一方の霊媒は、地域的伝統に則しつつ、社会変動のせいで曖昧になった文

化環境を再編成する役割を担っているが、他方の霊媒は、地域的伝統に則しつつも、都市化する社会環境を再解釈する役割を果たしている。

しかしながら、そこには共通する一つの傾向が存在する。つまり、信奉者は、「この世」と「あの世」を行き来する能力を持つ霊媒に依拠した社会生活全般の安定を求めており、霊媒の側でもそのような信奉者の希望に沿う形でセアンスを実施している。両者共、信奉者の心身の安定を儀礼的に保証しようとする点において共通しており、そもそも霊媒のセアンスは、過去数十年間の社会変動に直面しながらも、その自律的で潜在的な適応力を発揮しつつ、新たな儀礼的慣習を創造することで、セアンスの境界や能力を拡張してきたのである。

第3章では、伝統的都市国家ムアンの基柱という儀礼的象徴に関する公式儀礼と、この基柱の守護霊を崇拝するいくつかの精霊憑依儀礼について考察した。チェンマイには、ムアンの基柱という儀礼的象徴があり、この基柱を崇拝する公式儀礼が毎年実施されている。ムアンとしての歴史を持つインドシナ半島各地にも、同様の儀礼的象徴が存在するが、チェンマイの基柱には「インドラ神の柱」という固有名がある。その名の由来は、上座部仏教宇宙の中心である須弥山に止住するインドラ神が、柱の神通力により、危機に瀕したチェンマイの人びとを救ったという神話である。

本来、基柱を崇拝する儀礼は精霊憑依儀礼を内包しており、ラーンナー王権を正統化する役割を担っていたが、国民国家への統合の流れのなかで、第2次大戦後には上座部仏教儀礼として復興した。それ以来霊媒たちは、この儀礼の実施において、基柱周辺の儀礼道具の準備をはじめとする重要な役割を果たしている。ところが、彼らはこの儀礼をあくまでもムアン・チェンマイの守護霊祭祀と見なしており、それは精霊信仰に基づく儀礼道具や儀礼作法などに明らかである。霊媒たちは、国民国家的・上座部仏教的な価値観と交渉しながら、インドラ神の柱を崇拝するチェンマイの公式儀礼において、実質的に基柱の守護霊祭祀の儀礼司祭の役目を果たしている。

同時に霊媒たちは、基柱の守護霊を崇拝するいくつかの年中行事的な精霊憑依儀礼を独力で組織しており、一連の儀礼が、基柱を崇拝する公式儀礼を通して獲得した儀礼的正統性を霊媒術とリンクさせる。なかでも、旧市街北東角の守護霊祠における2種類の精霊憑依儀礼にはおおぜいの霊媒が集合し、生演奏の伝統音楽に合わせて、チェンマイの守護霊にダンスを奉納する。数々の宗教実践により、霊媒たちは、チェンマイの基柱の守護霊をヒエラルヒーの頂点とする霊媒集団を実践的に形成している。

第4章では、この霊媒集団と伝統的な共同体の接合に焦点を当てると共に、個々の霊

媒が主催する年中行事的な集団儀礼について考察した。伝統的都市国家ムアンの他にも、チェンマイ地域社会には母系親族集団や村落共同体などの伝統的な共同体が存在する。これらの歴史的、伝統的な共同体は精霊信仰と不可分の関係にあり、近年、霊媒術の霊媒たちが、これらの共同体と接合して協同で儀礼を開催する場合が間々ある。さまざまな形式に基づく精霊信仰の儀礼的秩序の再編成と興隆によって、霊媒コミュニティが形成されてきたという経緯が存在するが、逆に、霊媒術の集団儀礼が伝統的コミュニティの精霊祭祀に深く関わることも多い。グローバル化とは別個の回路のなかで自律的に展開する霊媒術とその宗教実践は、伝統的な共同体とその価値を再認識し、新たな儀礼的協同を実現している。

さらに個々の霊媒は、自らの祭壇を拠点として年中行事的な集団儀礼を主催しており、ヨック・クー（師の霊への崇拜儀礼）はその代表例である。儀礼会場にはおおぜいの霊媒が集い、賑やかな音楽に合わせて、主催精霊にダンスを奉納する。この集団儀礼は、既存の精霊全般に加えて、新たな種類の憑依精霊をも包含し得るような、一般的な形式に則って行われる。ヨック・クーは、主催霊媒を交代し、儀礼会場を移動しながら、雨安居期を除いて連日のように実践されている。広範な活動範囲を持つ霊媒術の宗教実践は、チェンマイの精霊信仰の諸ジャンルを集約し、再統合する役割を果たしている。この儀礼実践は、チェンマイ郡とその周辺地域を横断的に結び付け、さまざまな精霊信仰のジャンルを横断的に接合しながら、異種混濁的な霊媒集団を構築し続けている。

第5章では、チェンマイの集団憑依儀礼の原型とも言える母系祖霊崇拜儀礼ピー・メン（モン族の祖霊）と霊媒術の集団儀礼を、演劇的シーケンスや儀礼音楽といった儀礼的パフォーマンスの観点から比較考察し、一見非常に異なるこれらの儀礼が、細部に至るまで地域社会の社会関係のコンテクストのなかにあるということを明示した。ピー・メン儀礼は現在も盛んに実践されており、その歴史は霊媒術の集団儀礼の歴史より古い。この種の特別な種類の祖霊を崇拜する母系出自集団には、数年に一度精霊ダンスを伴う集団儀礼を実施する慣習が存在する。

ピー・メン儀礼と霊媒術の集団儀礼を、寸劇や儀礼音楽といった儀礼的パフォーマンスの観点から比較考察すると、一見非常に異なるこれらの儀礼が、細部に至るまで地域社会の社会関係のコンテクストのなかにあるということが明らかである。これらの2種類の集団憑依儀礼は、2種類の社会的・集団的アイデンティティを構築している。一方で、ピー・メン儀礼は、モン族由来と推定される数々の儀礼的シーケンスによって構成されるが、チェンマイの人びとにとって、それらのシーケンスは旧王朝時代の歴史

的な社会生活や社会関係を表象するものとなっており、一連の儀礼的表象は、ラーンナー王国時代の村落域の歴史的記憶を保存している。儀礼を通して人びとは、ゆるやかな世俗化を包含しつつ、伝統志向的・内部充足的なアイデンティティを構築している。他方で、霊媒集団儀礼は、チェンマイ地域社会の歴史性と現代性に纏わるゆるやかなエピソードを背景とした、多種多様な憑依精霊を有する霊媒たちの結び付きとして示されており、現代志向的・外部拡張的なアイデンティティを構築している。

これらの2種類のチェンマイの集団憑依儀礼は、方向性こそ異なるものの、それぞれが文化的・社会的アイデンティティを再生産し、発展させることに寄与している。ローカルな社会において異種混濁性を保ちながら自律的に存続する儀礼実践には、グローバル化の影響や国民国家の影響に対する違いを際立たせ、独自の日常空間を維持・発展させる展開力が備わっているのである。

第6章では、霊媒術の共同体主義的な傾向を裏付ける新たな儀礼創造の事例として、ラーンナー王国の初代王マンラーイをはじめとする13世紀の北タイの3人の王を崇拝する新たな儀礼について検討すると共に、これを契機に結成された霊媒たちの新たな互助団体の試みについて考察した。1990年代後半にはじまり、21世紀に入ってまもなくチェンマイの霊媒たちが主催するようになったこの儀礼は、今では1,000人もの参加者を集めるチェンマイ最大規模の儀礼となっている。旧市街中心部の広場で行われるこの儀礼では、チェンマイ建都に関わる3人の王を崇拝する霊媒集団儀礼と、2種類の母系出自集団による精霊憑依儀礼が同時に展開される。これらの儀礼コミュニティが互いに接合することで、還元不可能な一つの全体性としての新たな儀礼コミュニティが多層的・重層的に形成される。グローバル化の影響の本質が均質化だとするならば、この儀礼は、この均質性に対して地域的な標準を対置することにより、微細で地域的な文化的自律性を生産・再生産している。そこには、ラーンナー王国のエージェンシーの儀礼的な復興という意味が込められており、霊媒たちの儀礼実践は、国民国家とのあいだで文化的ヘゲモニーをめぐる交渉を繰り広げている。

さらにこの儀礼を契機に、霊媒たちは新たな互助団体を組織している。この試みは、これまでのインフォーマルな霊媒集団の枠を超えて、伝統的価値の体現者としての霊媒を組織する試行的な動きである。フォーマルな共同体主義とインフォーマルな共同体主義の対立を孕んではいるものの、そこに、現代の地域社会のなかで宗教実践を展開する霊媒たちの自律性と独自性を見て取ることができる。

終章では、チェンマイの霊媒術の宗教実践の創造性とエイジェンシーについて包括的に論じると共に、現代世界のなかの民衆の宗教実践とその可能性について論じた。霊媒集団とその宗教実践全体を通して、民衆が持つ状況を変革する力としての創造性が作動しており、この創造性が、宗教実践の自律的な展開力や突破力を生み出している。さらに現在、チェンマイの霊媒たちは、生活空間や社会空間のなかに存在するとされる精霊全般から、伝統的都市国家ムアンの守護霊に至るまで、精霊信仰のあらゆる局面に関与している。つまり彼らは、地域社会の儀礼的エイジェントの役割を引き受けつつあるのである。

北タイ、チェンマイの霊媒術のような儀礼の復興は、本質性を前面に出しながらも、実質的には現代世界に対する社会の周縁性を相対化し、馴致してゆくための戦略となる。現代世界のセッティングのなかで、儀礼を通して生み出されたローカルな力は、儀礼そのものと表裏一体の関係にあり、人間の手によりパフォーマンス的に生み出されるが、人間の認識を超えたところに位置し、人間社会に影響を与えるのである。